

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書

第21巻

令和5年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻頭言

令和6年1月に発生した能登半島地震は、甚大な被害をもたらしました。亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げるとともに、被害に遭われた皆様にはお見舞い申し上げます。発生から4か月以上が経ち各方面から支援が続く中、液状化被害によりライフラインの完全復旧には到底至らず、今も断水状態が続いている地域があります。また、避難者の仮設住宅への入居が進む一方、損壊している自宅へ戻られる方や、いまだ避難所で生活されている方が多くいます。そのような状況の中、高齢者の孤立化、限られた環境での運動不足、食生活の乱れ、コミュニケーション不足によるストレス増大や体調不良が懸念されます。物資支援だけでなく、幅広い視点での心身への支援も不可欠となっています。

石川県立看護大学は、震源地に最も近い大学として、学生や教員は自らが被災者と位置づけながら被災地と手を携え共に歩む姿勢を大切にしたいと考えています。今年の新入生の8割は県内出身であり、自宅が半壊や全壊した学生もいます。災害を経験したからこそ、被災現場では何が求められるのか、有事に備え日頃から知識を蓄え行動することが重要だと、一人一人が考えるきっかけになったかのように思います。本学は、教育機関として担うべき責務と役割を果たし、これからも可能な限り災害からの復旧・復興支援・健康増進に寄与できるよう教育、研究、社会貢献等に取り組む所存でございます。

令和元年度から広まりを見せた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、5類感染症に移行して1年が経ちました。とはいえ、新型コロナウイルスはなくなったわけではなく、引き続き室内換気や手洗い消毒などの感染予防対策は有効とされています。マスクの着用は個人の判断が基本となりましたが、混雑している場所や、医療機関・高齢者施設などではマスクの着用が推奨されています。附属地域ケア総合センターではこのような状況を踏まえ、各事業の性質に応じて、対面・オンライン・どちらも掛け合わせたハイブリッドの各方式で活発に活動してまいりました。オンラインでは、ZoomをはじめとするITを活用することにより、遠方などからも気軽に参加していただけることで参加人数が増加傾向にある一方、参加者の中にはより深くコミュニケーションを図りたいなど対面方式を望む声も多くありました。どのような活動があったかなど詳細については、この報告書に記録されておりますので、どうぞご覧ください。これからも皆様がセンターの活動により参加しやすく、活動自体が有意義なものになるよう企画し進めてまいります。

最後に、センターの活動を応援してくださった地域の皆さまの励ましとご協力に感謝を申し上げますとともに、センター長をはじめとしたこのセンターにかかわる教職員のご尽力に御礼を申し上げます。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学
学長 真田 弘美

ご挨拶

日頃から、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業にご協力いただき、誠にありがとうございます。今年度（令和5年度）は、人材育成事業として7事業、地域連携・貢献事業として11事業を実施しました。特に、5月にCOVID-19の感染症法上の位置づけが5類に移行したことで、コロナ前のように多くの事業を対面で開催することができ、多くの方々に参加していただくことができました。

人材育成事業では、コロナ禍で得たオンラインのスキルを取り入れつつ、ハイブリッド形式で事例検討会や研修会を行い、より多くの方々に参加いただくことができました。地域連携・貢献事業では、「運動が好きになる」親子スポーツ交流会や能登町主催のマラソン大会における「看護大健康キャンペーンテント」での学生と教員による健康支援など、多くの住民の皆様と交流することができました。

また、かほく市のいきいきステーションと協力した「いきいき世代とつくる健康教室」を6回実施したほか、FMかほくでの看護大学によるミニ健康講座に毎月出演（YouTube配信）し、かほく市等の住民の皆様にも本学の知見を還元することができました。

国際貢献事業の一部であるJICA日系研修や青年研修については、受け入れの体制を整えることができず、中止となりました。また、大学コンソーシアム石川地域連携専門部会では、令和5年度地域課題研究ゼミナール支援事業の地域共創支援枠に応募し、「かほく市の働き盛り世代の健康を増進する実践的アプローチ」が奨励賞を受賞しました。

その他、相談事業として、教員を病院や教育機関等に延べ41回講師として派遣し、看護・福祉・介護専門職の質の向上、県民の健康・福祉の向上等に寄与することができました。

一方、本学は、平成22年にかほく市との間で締結した包括的連携協定に基づき、さまざまな事業に取り組んできました。今年度は、新たな取り組みとして、地域の高齢者がeスポーツを体験することの効果の評価する研究を行いました。この研究は、高齢者がeスポーツを体験することで得られる可能性のあるメリットを明らかにするとともに、地域社会との連携を深め、高齢者の生活の質を向上させることを目指しています。

さらに、今年度から当センター事業に加わった地域創生事業では、本学は「能登・祭りの環」関係人口創出事業の矢波諏訪祭（能登町）と黒島天領祭（輪島市）に学生と教員が参加しました。これらの祭りは、地域の文化を体験し、地域とのつながりを深める絶好の機会となりました。また、大学コンソーシアム石川主催の「学都いしかわグローバルチャレンジプログラム」のローカルチャレンジプログラムにおいて、本学から4年ぶりに修了者を輩出することができたことは、大変喜ばしい出来事でした。

しかし、このような中、令和6年能登半島地震は、地域に甚大な被害をもたらすと同時に、地域における新たな課題が生じているところです。この困難な状況を乗り越えるために、本学は地域と協力し、さまざまな形で復興支援に取り組んでいるところです。今後とも能登に一番近い大学として、その責任を深く認識し、地域の復興と発展に向けて、全力を尽くしてまいります。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学 附属地域ケア総合センター
センター長 塚田 久恵

目次

(ページ)

1	人材育成事業	
1-1	専門職研修	
1-1-1	ご当地版 在宅療養移行支援システム創り 第2弾	1
1-2	本学教員主催の研究会・事例検討会	
1-2-1	ペリネイタル・グリーフケア検討会	2
1-2-2	看護研究に活かせる現象学を楽しく学ぼう	5
1-2-3	多職種とともに考えるがん患者の事例検討会	7
1-2-4	感性を磨く事例検討会	9
1-2-5	臨床で行うリンパ浮腫のケア	11
1-2-6	CNS関係者対象の看護事例検討会	12
1-3	相談サービス事業	
1-3-1	各種研修会等への講師派遣事業	13
1-3-2	病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況 (再掲)	14
2	地域連携・貢献事業	
2-1	地域連携・貢献事業	
2-1-1	あかちゃんをお空へみ送られた方の自助グループに対するサポート活動	15
2-1-2	能登の祭り応援事業	17
2-1-3	わたしと地域の未来を変革するSDGs	18
2-1-4	パーキンソン病いきいきリハビリ教室	20
2-1-5	ひとりで悩まないで！乳がんサバイバー同士で語り合おう	22
2-1-6	いきいき世代とつくる健康教室 (地域公開講座)	24
2-1-7	能登の健康応援隊	26
2-1-8	「運動が好きになる」親子スポーツ交流会	27
2-1-9	こころのシネマ学園台	28
2-1-10	『学童期・思春期の子どもを持つ母親への子育ての「Aka'aka サロン」』	30
2-1-11	宝達志水町における祭礼行事のアーカイブ作成	32
3	その他	
3-1	かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み	35

1 人材育成事業

1-1 専門職研修

1-1-1 ご当地版 在宅療養移行支援システム創り 第2弾

企画担当：石川 倫子 / 基礎看護学 教授

1. 事業の目的

高齢化率 45%・人口減少が進む能登北部地区で療養生活を送るためには独自の在宅療養移行支援システムを創る必要がある。そこで、能登北部地区で療養生活を送るための在宅療養移行支援システムを事例検討から創ることを目的とした。

2. 実施状況

開催日時：令和5年10月7日（土）10:00～12:00

開催方法：Webにて開催

参加者数：63名

開催内容：第1部 10:00～11:00

在宅療養を希望されるターミナル期患者への在宅療養移行支援

事例提供：輪島市立病院

第2部 11:00～12:00

「自宅で最期を過ごしたい」患者の在宅療養移行支援

事例提供：公立穴水総合病院

司 会：石川倫子（石川県立看護大学 基礎看護学講座 教授）

助 言 者：山中由貴子（公立羽咋病院 医療サービス推進室室長）

酢谷美和子（志賀町役場健康福祉課）

3. 実施内容

輪島市立病院、公立穴水総合病院ともに、医療処置の継続を家族に託し、本人と家族の希望に寄り添った在宅療養移行支援を行った事例を提供していただいた。これらの事例から学べた支援や今後につながる支援についてグループワークと全体討議を行った。その中で「死亡確認までの時間」は「本人と家族の最期の別れを静かに過ごす時間」と意味づけをして関わる看護師の重要性を学ぶことができた。活発な意見交換がなされ、能登北部地区ならではの在宅療養移行支援システムの構築・発展につながる学び多き検討会になった。

その市町ならではの在宅療養移行支援システムを創るためには、事例で検討し可視化することでシステム創りにつながることを確信した。

4. 評価と今後の課題

昨年度に引き続き、事例検討をとおして、各病院がそれぞれに行っているシステム創りを可視化することでシステムを構築できることを確信した。そのため、各病院独自の在宅療養移行支援システム創りの検討に入る予定であった。しかし、令和6年能登半島地震により、さらに医療・福祉に従事する人口は減った。これまでの在宅療養移行支援システムから新たなシステムに変更しなければいけない。「この街で生ききる」を支えるとは何かを問いながら、能登北部地区の在宅療養に関する実態をともに把握していくことから始めていきたい。



1-2 本学教員主催の研究会・事例検討会

1-2-1 ペリネイタル・グリーフケア検討会

企画責任者：米田 昌代 / 母性看護学 教授
メンバー：曾山 小織 / 母性看護学 講師
桶作 梢 / 母性看護学 助教
河合 美佳 / 母性看護学 助教
野沢 ゆり乃 / 母性看護学 助教

1. 事業の目的

グリーフケアの実践を学び、地域連携の構築をはかることによって、ペリネイタル・グリーフケアの充実をはかる。

今年度の目的：人工妊娠中絶を選択した女性のケアや胎児に病気や障がいが見つかったときに妊娠継続の可否を決定するときの支援の在り方を考える。

2. 実施状況

第29回 日時：令和5年7月22日（土） 会場 石川県立看護大学（ハイブリッド開催）

第1部 10:00～12:00 グリーフケアに関する基本的知識と関わり方の基本

具体的場面（中期中絶の分娩）検討・ロールプレイ → 全体共有

参加者 24名（対面20名 オンライン4名）（内学部生6名）

第2部 13:30～16:00

テーマ 「人工妊娠中絶をめぐる心のケア ～周産期喪失の臨床心理学的研究を通して～」

講師 管生聖子氏（大阪大学大学院人間科学研究科 准教授）

スケジュール 13:30～14:55 講演 15:05～16:00 施設間交流 → 全体交流

参加者 44名（対面31名 オンライン13名）オンデマンド1名（内学部生8名 院生9名）

第30回 日時：令和6年2月18日（日） 会場 石川県立看護大学（ハイブリッド開催）

第1部 10:00～12:00 グリーフケアに関する基本的知識と関わり方の基本

具体的場面（NICUでの父親の関わり）検討・ロールプレイ→全体共有

参加者 14名（対面10名 オンライン4名）

第2部 13:30～16:00

テーマ 「妊娠継続の検討から人工死産にまつわるケアを考える」

講師 星野よしみ氏（働く天使ママコミュニティ【イキヅク】）「自然死産・人工死産の体験を通して思うこと」

蛭田明子氏（湘南鎌倉医療大学 看護学部 教授・聖路加国際大学 天使の保護者ルカの会）「妊娠の継続の検討が必要になった方への支援・人工死産で赤ちゃんをなくされた方への支援」

スケジュール 13:30～14:55 講演 15:05～16:00 施設間交流 → 全体交流

参加者 16名（対面9名 オンライン7名）オンデマンド16名

3. 実施内容

第1部（午前の部）はケア経験が少ない方を対象に「グリーフケアに関する基本的知識と関わり方の基本について」を実施した。企画委員会からのレクチャーの後、具体的場面を設定（第29回は中期中絶の分娩場面、第30回はNICUでの父親へ関わる場面）し、ケアについて各グループで話し合い、できるグループがロールプレイを実施し、全体共有した。第2部（午後の部）は今年度は臨床現場でも関わりに苦慮する人工妊娠中絶にまつわるケアをテーマとして実施した。第2

部は講師の講演後、グループに分かれて、お話を聞いての感想、質問を話し合っていた後、各グループごとに話し合われた内容や出された質問を共有・発表し、講師にコメントしていただいた。

【第 29 回】

講師の菅生氏は臨床心理士の立場で外来での相談に対応するとともに、周産期のグリーフケアについて研究をされておられる方である。今回は執筆された著書を中心に事例に基づき、当事者に寄り添うために必要なことについて話していただいた。

【第 30 回】

講師の星野よしみ氏は自身の体験をもとに赤ちゃんを亡くされた方への職場復帰の方法についての情報提供や支援の必要性を感じ、自ら自助グループを立ち上げられ、活動している方である。ご自身の経験から医療従事者の対応で感じたこと、伝えたいことを中心に話していただいた。もう一人の蛭田明子氏は長年サポート活動をされており、その活動の中での当事者のみなさんへの関り、人工死産の決断前後の支援ニーズに関する研究結果より当事者の思いを話していただいた。また、実際に使用している冊子を提供していただいたり、実際のお話会の運営で留意していることを話していただいたことで具体的関わり方を学ばせていただいた。

4. 評価と今後の課題

第 1 部の基礎編と第 2 部のテーマに沿った講演が充実している。多職種が参加していると活力がもらえるという企画全体に対してのコメントもいただいている。

【第 29 回】

開催後のアンケート結果では、第 1 部に関しては、全参加者が内容・方法に関して満足と回答し、9 割が今後に活かせると回答していた。感想として、「日々の悩みが共有できた」「施設に持ち帰って広めたい」「多職種と話せてよかった」「(学生も) グループワークで発言しやすかった」と満足は高かったが、中には遠慮していた学生もいたため、次回からは全員が話せるように配慮していきたい。第 2 部については内容・方法・場所、今後に活かせるかについて全参加者が満足・活かせると回答していた。感想として、「事例を示して話して下さったのがわかりやすかった」「対象者の思いを大切にす姿勢や待つという時間の大切さを学んだ」「声かけの仕方などに活かそうと思う」と今後のケアに活かせる有意義なものとなっていた。グループワークの時間が短い、学生が多かったという回答もあったため、時間配分・メンバーに配慮していきたい。

【第 30 回】

開催後のアンケート結果では、第 1 部に関しては、内容・方法・場所、今後に活かせるかについて全参加者が満足・活かせると回答していた。感想として、「事例を用いて、様々な意見を聞くことが出来、実際にその場面をロールプレイとして行い、どういう声掛けを行ったらいいのかをイメージすることができてよかった」「助産師、NICU の看護師、学生など多角的な意見を聞いた」「グリーフケアの最新の知識も知ることが出来た。他施設とも事例を通して新たな気づきを得ることができた」と満足度は高かった。第 2 部に関しても内容・方法・場所、今後に活かせるかについて全参加者が満足・活かせると回答していた。

感想として、「グリーフ経験者の生の声を聴くことができた」「より望ましいと思われる具体的な事を行動レベルで知ることができた」「関わっていけそう」と今後のケアに活かせる有意義なものとなっていた。

今年度も新型コロナウイルスは 5 類に移行し、対面研修に支障はなくなり、講師の先生方も来ていただけるようになった。しかし、遠方の参加者は Zoom での開催を希望されるため、ハイブリッドでの開催が定着してきている。ハイブリッドでの運営は、音声についての対応も慣れてきて、特に問題はみられなかった。講師も含め、遠方からの参加が可能となり、他県の人々との交流をすることもできるため、今後もコロナ禍に関係なく、ハイブリッドでの企画を継続していきたい。今後、大学の事業とする場合は、県内の医療保健従事者対象となるため、検討が必要にな

ってくる。

企画委員とも Zoom 会議等を活用して意見交換を継続し、今後も続けていきたい。



第2部講師 菅生聖子氏



1-2-2 看護研究に活かせる現象学を楽しく学ぼう

企画担当：瀧澤 理穂 / 成人看護学 助教

桶作 梢 / 母性看護学 助教

牛村 春奈 / 在宅看護学 助手

1. 事業の目的

20年程前から看護学分野での現象学を用いた研究が盛んに行われている。しかし、現象学という学問が難解であるため、看護学の分野では正しくその方法論を用いた研究が少なく、初学者が現象学研究について学ぶ場がない。

そこで、マルティン・ハイデガーの専門家である高井ゆと里氏（群馬大学 准教授）と現象学的方法論を用いた看護研究者である牧野智恵氏（石川県立看護大学 名誉教授）を講師に招き、現象学方法論を用いた研究（原著）を参加者とともに読み進め、看護研究に活かせる現象学的研究について意見交換し、理解を深めることを目的とする。

2. 実施状況

参加者が関心のある現象学手法を用いた原著論文を提示してもらい、その内容についての用語、研究方法、分析方法、内容について疑問点などについて自由に意見交換しながら現象学的研究について理解を進めていった。

3. 実施内容(開催日・実施場所・参加者数・検討文献)

【第1回】令和5年5月23日（火）18時～20時

実施場所：オンライン開催（Zoom）

参加者数：14名

検討文献：「ここでゆっくり看取る—特別養護老人ホームでの看取り体制整備から定着までの看護師の実践構造—」工藤うみ著，弘前医療福祉大学弘前医療福祉大学短期大学部紀要，2（1），p71-80，2021.

【第2回】令和5年9月2日（土）13時～15時

実施場所：ハイブリット開催（石川県立看護大学附属地域ケア総合センター研修室およびZoom）

参加者数：11名

検討文献：「慢性疾患を有しながら独居生活を送っている男性高齢者の老いの体験」拝田一真他著，千葉看護学会会誌，27（1），p103-110，2021.

【第3回】令和5年11月21日（火）18時～20時

実施場所：オンライン開催（Zoom）

参加者数：8名

検討文献：「ナースコールが頻回なALS患者に関わる看護師の経験：解釈学的現象学的記述」長谷川幹子他著，日本看護科学学会誌，42，614-622，2022.

4. 評価と今後の課題

検討論文を読み進めながら、現象学の本質とはどのようなものだろうか？他の質的研究との違いとはなにか？などについて、参加者自身の看護実践や所属施設における医療観などを踏まえながら、活発な意見交換が行われた。現象学的研究の方法論や難解な哲学用語、素朴な疑問に関しても、講師の高井ゆと里氏と牧野智恵氏が身近な例えを用いながらわかりやすく解説していただき、「ここはそういう意味があったのか」「一人で読んだときはよくわからなかったが、皆と読み進めていくうちに納得できた」などの感想が聞かれた。

これまで発表された現象学を用いた看護研究を手がかりに、ディスカッションを交えながら方

法論や哲学用語の学びを深めることで、現象学的アプローチを用いた看護研究の理解や研究推進につながり、現象学という難解な学問を身近に感じる機会になったと思われる。

また本企画は本学の教員や大学院生のみでなく、県内外の病院の医療者（看護師、助産師）や他大学の研究者からも参加があったため、現象学を用いた看護研究に関心をもつ研究者同士の交流の場となったと考えられる。

今後は公表された論文について検討するだけでなく、参加者の論文投稿や学会発表などを支援する取り組みも実施していきたい。

初學者歓迎！ 石川県立看護大学 地域ケア総合センター事業

看護研究に活かせる 現象学を楽しく学ぼう

現象学を用いた看護研究に関心があっても、難しくわからない……と感じませんか？参加者同士で現象学方法論を用いた研究(原著)を読み進めながら、看護研究に活かせる現象学的研究手法について楽しく学びましょう！

第1回	5月23日(火) 18時～20時	オンライン (ZOOM)
第2回	9月2日(土) 13時～15時	会場(本学) およびオンライン ※講師が来学されます
第3回	11月21日(火) 18時～20時	オンライン (ZOOM)

講師 マルティン・ハイデガーの専門家
高井 ゆと里 先生
(群馬大学 准教授)
現象学的方法論を用いた看護研究者
牧野 智恵 先生
(石川県立看護大学名誉教授、がんサロニゴス 代表者)

対象
・看護師
・研究・教育職
・大学院生(学部生)

【申し込み方法】
※各回の3日前までにお申し込み下さい
石川県立看護大学伊一地域ケア総合センター
→事業内容→令和5年度事業一覧

企画責任者
石川県立看護大学 成人老年看護学講座 池澤 理穂
☎ 076-231-8300
✉ sogocen@ishikawa-nu.ac.jp





1-2-3 多職種とともに考えるがん患者の事例検討会

企画担当：松本 智里 / 成人看護学 准教授

1. 事業の目的

多職種とともに施設の垣根を越えて、日頃のがん患者や家族へのケアについて事例検討することで、様々なライフステージのがん患者に対応できる看護師、医療従事者を育成することを目的とする。

2. 実施状況

開催回数：全6回実施した。全てZoom開催であった。

令和5年 6月6日(火)、8月1日(火)、10月3日(火)、12月5日(火)

令和6年 2月6日(火)、3月5日(火)

17時45分～18時45分（事例検討：45分、ミニレクチャー：15分）

3. 実施内容

【第1回 6月6日：参加者数138名】

テーマ「外来でがん薬物療法を受ける患者への治療期を支える訪問看護師の関わり」

事例提供者：訪問看護ナースソフィアにいかわ がん看護専門看護師 時山麻美氏

ミニレクチャー「外来でがん薬物療法を受ける患者への訪問看護の実際」

講師：訪問看護ナースソフィアにいかわ がん看護専門看護師 時山麻美氏

【第2回 8月1日：参加者数139名】

テーマ「『元気の出ない』感覚をどうとらえるか？」

事例提供者：福井県立病院 がん看護専門看護師 玉村尚子氏

ミニレクチャー「倦怠感のある患者さんにできることを考えよう」

講師：福井県立病院 がん看護専門看護師 玉村尚子氏

【第3回 10月3日：参加者数89名】

テーマ「薬物療法の継続か中止を考える時期における患者の力を引き出す患者への関わり」

事例提供者：富山西総合病院 がん薬物療法看護認定看護師 越後弥生氏

ミニレクチャー「倦怠感のある患者さんにできることを考えよう」

講師：富山西総合病院 がん看護専門看護師 中島佳子氏

【第4回 12月5日：参加者数98名】

テーマ：「認知症を抱える高齢がん患者への安全ながん薬物療法の実施に向けて」

事例提供者：石川県立中央病院 がん看護専門看護師 藤川直美氏

ミニレクチャー：「がん薬物療法を受ける高齢がん患者のケア」

講師：石川県立中央病院 がん看護専門看護師 藤川直美氏

【第5回 2月6日：参加者数97名】

テーマ：「退院後、在宅支援を断った終末期AYA世代患者の支援を振り返る」

事例提供者：市立砺波総合病院 がん看護専門看護師 平優子氏

ミニレクチャー：「災害時のがん患者の備えと支援」

講師：市立砺波総合病院 がん看護専門看護師 平優子氏

【第6回 3月5日：参加者数63名】

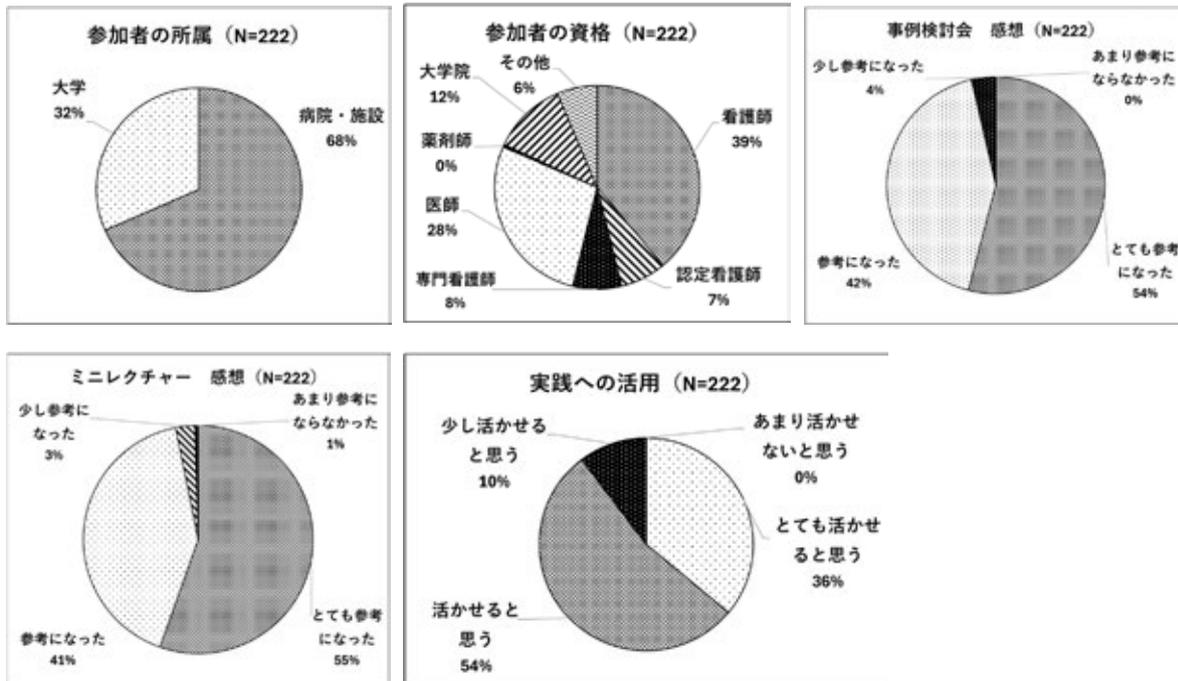
テーマ「遺伝学的検査を受ける？受けない？意思決定に難渋する患者の支援を振り返る」

事例提供者：福井県立病院 がん看護専門看護師 中野妃佐恵氏

ミニレクチャー「乳がん患者と遺伝学的検査－患者を取り巻く問題と必要な支援とは」

【成果】

参加者は過半数が看護師であったが、医師、歯科医師、放射線技師、臨床検査技師、言語聴覚士、公認心理士、介護支援専門員など、多職種の参加があった。さらに、全ての回のアンケート結果で、事例検討会、ミニレクチャーともに「とても参考になった」「参考になった」と回答した人が、合わせて95%以上であった。今後の実践への活用は「とても活かせると思う」「活かせると思う」と回答した人が合わせて90%以上であった。



《参加者からの感想》

- ・臨床に参加する機会が少なく、患者さんの苦痛を評価する最近の方法を知ることができてとてもためになった。
- ・大学院生でまだ資格もなく臨床経験がないのですが、患者家族だった身として、ミニレクチャーの経過の説明が思い当たることがとても多く、これからの臨床現場でそのような場面の患者さんに会ったときにどのように接していくべきかを学ぶこと、考えることが出来ました。
- ・自分は将来医師や看護師になるカリキュラムを履修しているわけではないが、遠い未来に自分がこのような事例に該当する可能性があると思いながら話を聞くことができた。
- ・また違うかたちでもいいので検討会があれば、日々の看護に活かせられると思っています。貴重な症例の数々ありがとうございました。
- ・がん患者の緩和、生き方、寄り添い方など様々な視点から意見をお聞きできるのでとても有意義であった。

4. 評価と今後の課題

第1～5回では80名以上の参加があり、アンケート結果からも高評価を得ている。第6回の参加者が少なかったのは、能登半島地震の医療支援により参加者が少なかったものと考えられる。本事例検討会はがん患者に携わる医療者のための、困難事例の解決や新しい知見の提供に役立つと評価する。資料配布を望む声もあったが、オンライン開催のため、個人情報保護の観点から希望に添えなかったことが課題であった。今後の継続については北陸CNSの会に主催を期待し、本学主催の事例検討会は終了とする。

1-2-4 感性を磨く事例検討会

企画担当：美濃 由紀子 / 精神看護学 教授

1. 事業の目的

職場外で多職種と共に困難事例について検討することのできる安心・安全な語りの場を提供すること。また、患者、援助者、患者-援助者関係、臨床状況、という事例の4局面に視野を広げ、援助者の感情に焦点を当てた事例の包括的なアセスメントを通じて、患者理解のための援助者の感性を培い、参加者のエンパワメントを目指すこと。

2. 実施状況

(1) 開催日時と参加人数

令和5年4月から令和6年3月までに、計11回実施し、延べ248名の参加があった。

回	日時	参加人数
1	令和5年 4月 20日 (木) 18:30 ~ 20:30	27名
2	令和5年 5月 11日 (木) 18:30 ~ 20:30	18名
3	令和5年 6月 8日 (木) 18:30 ~ 20:30	23名
4	令和5年 7月 13日 (木) 18:30 ~ 20:30	24名
5	令和5年 9月 14日 (木) 18:30 ~ 20:30	22名
6	令和5年 10月 12日 (木) 18:30 ~ 20:30	23名
7	令和5年 11月 9日 (木) 18:30 ~ 20:30	22名
8	令和5年 12月 14日 (木) 18:30 ~ 20:30	24名
9	令和6年 1月 11日 (木) 18:30 ~ 20:30	24名
10	令和6年 2月 8日 (木) 18:30 ~ 20:30	26名
11	令和6年 3月 14日 (木) 18:30 ~ 20:30	15名
参加者総数		248名

(2) 開催場所

全ての日程をオンライン (Zoom) で実施した。

(3) 参加申込者の属性

1) 職種

看護師	保健師	助産師	医師	管理栄養士	当事者	その他
80.5%	3.6%	0.9%	7.7%	0.9%	1.4%	5.0%

2) 主たる業務に加えて担っている役割

専門 看護師	認定 看護師	教育職	管理職	心理職	大学院生	医学部生	その他
5.3%	12.7%	35.3%	6.6%	2.0%	23.3%	2.0%	12.8%

(4) 講師等

スーパーバイザー：宮本 眞巳 (東京医科歯科大学 名誉教授)

コーディネーター：美濃 由紀子 (石川県立看護大学 精神看護学 教授)

大江 真吾 (石川県立看護大学 精神看護学 講師)

事務局：川俣 文乃 (石川県立看護大学 精神看護学 助教)

高濱 圭子 (石川県立看護大学 精神看護学 助教)

3. 実施内容

各月、事例提供を募り、事例の4局面（患者、援助者、患者 - 援助者関係、臨床状況）に沿いながら検討を進めた。参加者は、県内のみならず全国から集まったことにより、各地域によるケアの傾向が浮かび上がった。拠点を異にする援助職どうしの交流は、ケアにおける地域間格差をなくし、ケアの改善に役立つと好評を得た。今年度は、さらに多職種の援助職の参加があり、看護職だけでなくそれぞれの職種の視点からの検討を行うことができ、貴重な意見交換ができた。

検討会では、参加者が自身の感情に焦点を当てることの意味や、自己一致の重要性への気づきが得られた。そして、広い視点での意見交換、プロセスレコードを超えた新たな視点での検討などから様々な参加者の意見が実践の参考になったことが語られた。検討会中には、「プロセスレコード」や「異和感の対自化」シートを用いた場面の振り返りを行うことで、提供者を含む参加者全員の対人援助の能力向上に繋がる取り組みとなったと考えられた。事例提供者からは、「事例提供して参加者と検討することで安心感、一体感を感じた」「視野が広がった、気づきを得られた」等、エンパワメントされたという内容の発言が多く聞かれた。

今年度は月1回の事例検討会に加え、第43回日本看護科学学会にて「感性を磨く事例検討会」の交流集会を開催した。参加者は30名を超え、スーパーバイザーである宮本眞巳氏の講義だけでも聴講したいという方も多くおり、大きな反響があった。

4. 評価と今後の課題

(1) 評価

今年度も包括的な事例アセスメントによって新たなケアの方略を見出し、その実現のためのエネルギーを事例提供者に獲得してもらうことができている。また、事例提供者は事例を検討することで安心感や一体感を得ることができたと言っており、困難な事例に対処している看護師へのサポートの場にもなっている。事例提供者の感情に焦点を当てながら、参加者の率直な思いも表現できる検討会の場は、事例提供者のみならず、参加者全員への学びやエンパワメントをもたらしている。

(2) 今後の課題

参加者からはオンライン（Zoom）での開催によって遠方から参加できてよいという意見や県外の参加者との意見交換ができることが良いという意見がある一方、より深い意思疎通やコミュニケーションを図りたいと対面開催を望む参加者の声があった。双方の希望に応えられるよう、対面と遠隔のハイブリッド型での事例検討会を企画していく。参加者の多様性が検討会を活性化すると考えられるため、引き続き広報活動に注力してさまざまな背景および属性を持つ参加者の獲得を目指す。また、本事業の効果を測定するため、参加者の協力を得ながら調査を実施している。引き続き、データ収集を行っていく。調査結果に基づいて、これまで蓄積されてきた事例検討の方法論をさらに発展、醸成し全国へ広めていく。

1-2-5 臨床で行うリンパ浮腫のケア

企画担当：今方 裕子 / 成人看護学 講師

1. 事業の目的

リンパ浮腫は、手術によるリンパ節郭清や、放射線治療、化学療法といったがん治療によって発生する。臨床で行うリンパ浮腫ケア基礎編は、リンパ浮腫に関する知識をもち、教育やケアに携われるように、リンパ浮腫の予防的介入から終末期まで様々な段階でのリンパ浮腫のケアを理解する目的で開催している。応用編は、基礎編を修了した方々を対象に、基礎編で学んだ知識と技術を活用し臨床で実践していただく目的で開催している。

2. 実施状況

【基礎編】

開催日時：令和5年7月29日（土） 9:30～16:00

開催場所：石川県立看護大学 1階 中講義室1

参加者数：36名

【応用編】

開催日時：令和5年8月11日（土） 9:00～13:00

開催場所：石川県立看護大学 2階 成人・老年看護学実習室

参加者数：13名

【講師】

高地弥里 石川県済生会金沢病院 がん看護専門看護師

日本医療リンパドレナージ 中級セラピスト

時山麻美 訪問看護ナースソフィアにいかわ がん看護専門看護師

日本医療リンパドレナージ 中級セラピスト

今方裕子 石川県立看護大学 成人看護学 講師 がん看護専門看護師

3. 実施内容及び成果

当日は病院、クリニック、介護施設等で勤務されている、看護師、理学療法士に参加いただいた。

基礎編では、基本的な事柄を分かりやすく丁寧に解説いただき、動画を用いたセルフリンパドレナージのデモンストレーションを実施した。応用編では、リンパ浮腫を発症した事例検討を行い、また今年度新たに、エコーによる浮腫の観察演習を導入した。エコーを手に取り、熱心に観察を行う参加者の様子が伺えた。

4. 評価と今後の課題

講師の講義や手技に多くを学ぼうと熱いまなざしが注がれ、直接指導を受けながらより実践的な質問が上がり、具体的なケア方法の習得により、臨床での実践が期待されるセミナーとなった。



1-2-6 CNS関係者対象の看護事例検討会

企画担当：今方 裕子 / 成人看護学 講師

1. 事業の目的

専門看護師(CNS)は、複雑で解決困難な看護問題を持つ患者、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供する役割がある。北陸3県で活動するCNSがその役割を発揮するため日々の実践を振り返る機会は限られており、自ら課題解決していく力を養うこと、悩みを共有し看護実践に生かすための機会が必要である。そのため、本事業は、がん専門看護師受験予定者および資格更新者の事例検討を通して、日々の実践を振り返り、課題解決力を養うことを目的として開催した。

2. 実施状況

第1回：令和5年9月5日(火) 17:30～18:30 オンライン(Zoom) 参加者 24名

事例提供者：天日更織氏(金沢市立病院 がん看護専門看護師候補生)

コメンテーター：牧野智恵氏(石川県立看護大学名誉教授)

第2回：令和6年2月27日(火) 17:30～18:30 オンライン(Zoom) 参加者 14名

事例提供者：樋口麻衣子氏(富山大学附属病院 がん看護専門看護師)

コメンテーター：牧野智恵氏(石川県立看護大学名誉教授)

3. 実施内容

第1回の事例は、「コンサルテーション」に関する事例で、今年度CNS認定審査を受験予定の1名から、事例提供があった。意思決定困難事例への関わりについて活発なディスカッションが行われた。

第2回の事例は、「倫理調整」に関するテーマで、がん看護専門看護師の更新予定のCNSより事例提供があった。倫理調整を行う上での大切なCNSとしての視点、多職種との調整方法を共有し実りある事例検討会となった。



4. 評価と今後の課題

事例提供者が実践した方略について意見交換がなされ、立場や施設を超えて活発なディスカッションが行われた。複雑な看護問題に直面する患者・家族へCNSの役割に関する検討によって、CNSの日々の実践を振り返り、課題解決能力の向上につながった。今後もCNSが集い、意見交換することでブラッシュアップにつながる機会の検討が必要である。

1-3 相談サービス事業

1-3-1 各種研修会等への講師派遣事業

看護・福祉・介護専門職の質の向上、県民の健康・福祉の向上、行政課題の解決に資することを目的に、看護研究の支援や、研修等へ本学専任教員が出向いた。

分野別派遣件数

番号	1	2	3	4	5	6	計
種類	病院等	職能団体 (看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係 の任意団体	その他	
回数	22	1	4	14	0	0	41

No.	派遣講師 (職名 氏名)	派遣日程	派遣場所	内容	主催者	種類 番号	回数
1	講師 大西 陽子	R5.7～R6.3 計4回	珠洲市総合病院またはZoom	看護研究指導	珠洲市総合病院	1	4
2	准教授 松本 智里 講師 千原 裕香	R5.5.19 8:30～12:00	公立能登総合病院	看護研究指導	公立能登総合病院	1	1
3	准教授 中道 淳子	R5.5～R6.3	公立宇出津総合病院	看護研究指導	公立河北中央病院	1	1
4	講師 大江 真吾	R5.6.6, 6.7, 6.8 17:30～20:00	金沢医療センター	看護研究指導	金沢医療センター	1	3
5	講師 大橋 史弥	R5.6.30 17:30～18:30	石川県立看護大学 (Zoom で実施)	看護研究指導	公立宇出津総合病院	1	1
6	講師 大橋 史弥	R5.6～R6.3 計3回	公立宇出津総合病院	看護研究指導	公立宇出津総合病院	1	3
7	講師 田村 幸恵	R5.6～R6.3 計4回	JCHO 金沢病院	看護研究指導	JCHO 金沢病院	1	4
8	准教授 寺井 梨恵子	R5.7.7 13:30～15:30	野々市明倫高等学校	看護職に必要なスキル	野々市明倫高等学校	4	1
9	講師 大江 真吾	R5.8.23 13:30～14:30	金沢医療センター	看護研究指導	金沢医療センター	1	1
10	教授 塚田 久恵	R5.9.1 13:00～15:55	石川県地場産業振興センター	コーディネーター	(一財)日本公衆衛生協会	1	2
11	講師 大西 陽子	R5.9.3 10:00～15:00	イオンモールかほく	救急フェア啓発活動	かほく市消防本部	3	1
12	助教 瀬戸 清華	R5.9.15 15:00～15:45	野々市明倫高等学校	看護医療系ガイダンス	野々市明倫高等学校	4	1
13	助教 桶作 梢 助教 河合 美佳	R5.9～R6.2 計12回	かほく市内各小学校	性教育	かほく市教育委員会	4	12
14	講師 大江 真吾	R5.10.2 13:30～14:30	金沢医療センター	看護研究指導	金沢医療センター	1	1
15	講師 大江 真吾	R5.10.13 10:30～11:10	イオンモールかほく	こころの健康講座	かほく市健康福祉課	3	1
16	講師 田村 幸恵	R5. 10. 19 17:30～19:00	JCHO 金沢病院	看護研究指導	JCHO 金沢病院	1	1

17	教授 塚田 久恵	R5.11.14 9:50~16:30	石川県庁行政庁舎	新任保健師等研修会	石川県健康推進課	3	1
18	講師 大江 真吾	R5.11.26 9:40~10:30	金沢大学附属病院	看護学会研究発表講評	石川県看護協会	2	1
19	学部長 川島 和代	R5.12.18 13:30~15:00	石川県立看護大学	家族介護者教室	かほく市長寿介護課	3	1

1-3-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区/県	派遣病院名	指導内容	講師名	回数
金沢	金沢医療センター	看護研究指導・研究	講師 大江 真吾	5
	JCHO 金沢病院	看護研究指導	講師 田村 幸恵	5
	河北中央病院	看護研究指導	准教授 中道 淳子	1
能登	珠洲市総合病院	看護研究指導	講師 大西 陽子	4
	公立能登総合病院	看護研究指導	准教授 松本 智里 講師 千原 裕香	1
	公立宇出津総合病院	看護研究指導	講師 大橋 史弥	4

2 地域連携・貢献事業

2-1 地域連携・貢献事業

2-1-1 あかちゃんをお空へみ送られた方の自助グループに対するサポート活動

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 教授

1. 事業の目的

あかちゃんを亡くされた方がアクセスしやすいような体制作りと会の広報、お話し会開催によって、あかちゃんを亡くされた方の自助グループ活動を支援する。また、個別相談体制、医療施設・行政との連携を強化していく。

- 1) お話し会の運営をサポートする。
- 2) 体験者、臨床、地域からの相談があった場合、個別相談もしくは、5つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

2. 実施状況 3. 実施内容

①お話し会開催 日時・場所

対象：流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等であかちゃんを亡くした方

回数	月日	時間	主催	場所	参加人数
第1回	R5. 4. 23 (日)	13:30~15:30	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第2回	R5. 5. 21 (日)	13:00~15:00	グリーンケアカフェ	シェアマインド金沢	6
第3回	R5. 6. 5 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	6
第4回	R5. 7. 23 (日)	10:00~12:00	グリーンケアカフェ	シェアマインド金沢	7
第5回	R5. 7. 30 (日)	13:30~15:30	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第6回	R5. 9. 9 (土)	10:00~12:00	グリーンケアカフェ	シェアマインド金沢	8
第7回	R5. 10. 2 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	6
第8回	R5. 10. 22 (日)	13:30~15:30	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第9回	R5. 11. 26 (日)	10:00~12:00	グリーンケアカフェ	シェアマインド金沢	6
第10回	R6. 1. 21 (日)	10:00~12:00	グリーンケアカフェ	シェアマインド金沢	5
第11回	R6. 1. 28 (日)	13:30~15:30	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第12回	R6. 2. 5 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	6
第13回	R6. 3. 10 (日)	10:00~12:00	グリーンケアカフェ	シェアマインド金沢	5

*「小さな天使のママの会」はハイブリッド開催

②適宜メール相談・電話相談・面談

・体験者からのメール相談：3件（2件お話し会へ）

③体験者の話を聞く場

R5. 6. 27 (火) 10:40~12:10 母性看護方法論の講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。

④広報活動

適宜、ちらしを各自治体・市町、医療施設に配布した。

NHK名古屋放送局 天使ママやパパ、ペリネイタルロスをテーマにした番組制作のための取材対応

⑤全国のあかちゃんを亡くした方の自助グループ、支援者との情報交換

・6月4日と10月8日、2月4日に小さな天使ママの自助グループの集いを実施し、自助グループを運営する上での悩み等を共有し、情報交換しあった。次年度も他の自助グループにも案内し、継続して実施していく予定である。

・不妊・不育ピアサポーター養成研修（12月23日:大阪）にファシリテーター・記録係として参加し、全国の支援者、ピアサポーターと交流した。

⑥研修講師

11月17日 石川県庁にて石川県少子化対策監室からの依頼で研修講師を務める。

「グリーフケアの実践的プログラム」

4. 評価と今後の課題

遠方の参加者においてはハイブリッドでも対応することができ、有意義な会となった。メールで相談を受けていた体験者をお話し会につなぐことができた。

各自助グループ同士の交流も、支援する立場としての悩みを共有できる場であり、自助グループ存続のためにも必要であると考えられるため、今後も継続していく。行政での支援も強化されていく中で連携し、研修講師をつとめたり、自助グループの体験者への橋渡しをしていく。



小さな天使のママの会 お話し会

2-1-2 能登の祭り応援事業

企画担当：市丸 徹 / 健康科学 准教授

1. 事業の目的

人手不足・規模縮小に直面している地方の伝統的祭りの手伝いを通じた地域活性化。
能登町過疎地区住民の生きがい増進。
能登町過疎地区住民の健康増進（大学訪問時の講演、骨密度測定等）。
学生の地域生活への理解を深める。

2. 実施状況

令和5年度は5月にコロナ禍がようやく明け、企画の実施が期待された。しかし9月25日に予定されていた白丸曳山祭りの訪問は、地元の過疎・少子化により「きやらげ」の成り手の確保が叶わず、白丸曳山祭り自体が中止となり、実施を断念せざるを得なかった。秋に予定していた白丸地区住民による看護大学訪問は簡素化して久しぶりに実施でき、大学祭当日に受け入れた。3月の白丸公民館まつりにも訪問を計画し現地との調整を進めていたが、白丸地区が令和6年能登半島地震により甚大な被害を受けたため公民館は避難所となり、まつり自体が残念ながら中止となった。

3. 実施内容

令和5年10月21日（土）10～11時、能登町白丸公民館から神田幸夫館長以下12名の住民の訪問を受けた。フィールド実習にて令和4年にお世話になった2年生から1名と、令和5年にお世話になった1年生6名全員が出迎え、大学構内を案内しつつ、看護大大学祭の企画を楽しみ、交流を深めた。



4. 評価と今後の課題

コロナ禍も明けてようやく訪問が叶うことが期待されたが、地域の少子化進行に伴って男子小学生を必須とする伝統行事「白丸曳山祭り」はついに開催できなくなり、今後も復活の見通しは低い。さらに年明けには突然の震災で甚大な被害を受け、訪問どころではない状況となった。不可抗力が重なり、事業の企画は実施できないままに終了せざるを得ない判断となった。

しかしもともと、高齢者が元気で地域交流のロールモデルとして学生が学べることも多い土地柄である。今後は住民の流出も生じ、震災からの復興は長期戦になるかと思われるが、各段階での取り組みに学生とともに参加しながら、地域住民への支援を考えていきたい。

2-1-3 わたしと地域の未来を変革する SDGs

企画担当：寺井 梨恵子 / 基礎看護学 准教授

1. 事業の目的

地域住民および学生が SDGs を理解し、身近な課題として捉え、「わたしができること」からまずは始めるきっかけを得ることを目的とした。

2. 実施状況

実施内容としては、新たに「脱炭素まちづくりカレッジ」を取り込んで開催した。すべて対面で計7回の開催と延べ177名の参加者があった。

3. 実施内容

回	月日	時間	内容	参加者
第1回	R5.5.25	13:00-16:10	SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：金城大学公衆衛生看護学専攻科 ファシリテーター：寺井梨恵子	計12名 1年生10名 教員2名
第2回	R5.6.24	8:45-11:45	星稜高校 GSP SDGs de 地方創生 ゲーム体験会 場所：星稜高校 ファシリテーター：寺井梨恵子 学外ファシリテーター：寺井千咲	高校生 1～3年生 15名
第3回	R5.7.19	13:00-15:00	金沢伏見高校 看護セミナー 認知症世界の歩き方 ダイアログ 場所：金沢伏見高校 ファシリテーター：寺井梨恵子	高校生 1～3年生 54名
第4回	R5.8.10	13:30-15:30	ゲームを通して持続可能な社会を考える 1DAY 認知症世界の歩き方 対話&デザイン 場所：金沢未来まち創造館 ファシリテーター：寺井梨恵子、森 雅貴 (issue+design) サポーター：瀬戸清華	6名 中学生1名 大学生3名 (2-4年生) 教員2名
第5回	R5.8.10	18:30-21:00	ゲームを通して持続可能な社会を考える 1DAY 脱炭素まちづくりカレッジ 場所：金沢未来まち創造館 ファシリテーター：森 雅貴 (issue+design) サポーター：寺井梨恵子、松本智里、瀬戸清華	15名 中学生1名 大学生2名 一般8名 教員4名
第6回	R5.11.7	13:30-15:30	津幡町いきいきサロン研修会 認知症世界の歩き方 ダイアログ 場所：津幡町社会福祉協議会 ファシリテーター：寺井梨恵子	50名 いきいきサロン代表者
第7回	R5.12.20	16:20-17:50	災害ボランティアサークル ふたば 風水害24体験会 場所：石川県立看護大学 地域在宅精神看護学実習室	25名 大学生24名 教員1名

			ファシリテーター：寺井梨恵子 サポーター：松本智里、瀬戸清華 ふたば顧問：武山雅志、室野奈緒子	
--	--	--	---	--

「SDGs de 地方創生カードゲーム」、「認知症世界の歩き方」、「風水害 24」の成果はこれまでの実施内容を含めて、石川看護雑誌 第 21 巻に報告した。そのため、今年度新たに実施した「脱炭素まちづくりカレッジ」について下記に記載する。

・内容

脱炭素まちづくりカレッジとは、気候危機や脱炭素の基礎知識を身につけ、持続可能なまちづくりや地域づくりについて学ぶことができるカードゲーム型プログラムである。学生や企業、行政関係者など世代も立場も異なる初めて出会った参加者が、それぞれの観点や価値観から議論を交わし、利害関係も見られ現実世界の縮図を体験でき、まさにゲーミフィケーションの利点を感じられた。ゲームでは、スタート時に 100 であった排出量も、熟考しながら事業を実施し、再エネの促進やコミュニティの成熟度が高まることで、最終的に半減させることにつながった。会場全体が拍手と達成感に包まれた。最後に、マイ CO2 ワークシートを用いて、自分のカーボンフットプリント指数を他の参加者と比較し、自身の CO2 排出量の特徴や、どのような行動や習慣が影響しているかに気づき振り返った。日本の CO2 全排出量の 6 割が個人で排出していることから、個人がまずは意識することが大切であると実感した。



4. 評価と今後の課題

今年度は出張開催（高校、大学専攻科、津幡町社会福祉協議会の計 4 回）や学外（金沢未来まち創造館）での開催など、参加者の多様化につながった。本学の学生にとっては、世代の異なる地域住民との交流の機会にもなった。

2-1-4 パーキンソン病いきいきリハビリ教室

企画担当：岩佐 和夫 / 健康科学 教授

1. 事業の目的

パーキンソン病ではリハビリテーションが病状の進行予防に有用であり、同病の患者同士の情報交換も病状把握や治療の自己決定において重要である。本事業においては、リハビリテーションを楽しく体験してもらい、リハビリテーションへの参加意識を向上させること、また、パーキンソン病患者に対し、お互いに情報を共有する場や疾患に関する情報発信の場を提供することを目的とした。

2. 実施状況

令和5年度のパーキンソン病いきいきリハビリ教室は、夏と冬の2回開催を行った。1回目の教室は開催希望のあった能登地方（七尾市）にて開催を行った。食と口をテーマに講演を行い、リハビリ教室についてもパーキンソン病の運動機能を改善させるための体操を中心に紹介した。2回目の教室は、金沢医療センターと共同開催をおこなった。金沢市文化ホールを会場とし順天堂大学の服部信孝教授をお招きしパーキンソン病患者に希望を与える最新の治療について紹介していただいた。さらに、昨年度の本教室で好評を得ていたパーキンソン病に特化したLSVTリハビリの紹介とこれに基づいた運動指導を行い、リハビリの重要性を理解してもらった。また、金沢医療センターで行っているKMCパーキンソン病体操研究会の運動を紹介した。石川県PDの会と医療スタッフとの交流の機会もえることができ、PDにおけるリハビリ啓発に有用であった。

3. 実施内容

実施内容および成果：

1 「第4回 パーキンソン病いきいきリハビリ教室」

開催場所：七尾市矢田郷地区コミュニティーセンター（多目的ホール）

開催日時：令和5年7月30日（日） 10：00～12：00

講演：訪問看護ステーションみなぎ コミュニティナース虹色ケア 中村悦子先生

「演題目：地域栄養ケアを極める！～生き活きと生きるためにできること～」

リハビリ教室：訪問看護ステーションみなぎ コミュニティナース虹色ケア 稲葉長彦先生

「明日からすぐにできる！～元気いっぱいパーキンソン体操～」

懇親会・相談会：中村悦子先生、稲葉長彦先生、脳神経内科専門医による質疑応答

参加者人数： 24名

パーキンソン病患者および家族 11名

医療関係者(看護師、PT・OT、医師) 6名

講師 2名

デリソフタースタッフ： 1名

看護大スタッフ： 4名（1名の学生ボランティア学生を含む）

輪島市や羽咋市で施設長を務め活躍されている中村悦子先生から地域医療の立ち上げから運営、神経難病等への支援についてお話を伺った。栄養管理のみでなく、食形態の重要性についてもお話があり、食べ物の形を保ったまま軟飯やミキサー食と同様の柔らかさ、食べやすさを可能とした食事についても紹介していただき、実際に試食も行うことができた。PD患者さんからは、口の中に入れた瞬間にほぐれ、味も保たれた状態で調理された食事の試食に関心をもたれ、喜びの声も聴くことができた。在宅医療における食事に関し参考となる講演であった。講演後は、パーキンソン病患者が自宅でもできるリハビリ体操を紹介していただいた。無理なく毎日継続して運動

を続けることの重要性と実際に楽しく体を動かすことができる体操の紹介を行い、能登地区におけるリハビリの啓発を行うことができた。

交流会では地元の脳神経内科医の参加もあり、在宅で療養を行う際の注意点や服薬に関する質問に答えていただいた。

2 「第5回パーキンソン病いきいきリハビリ教室」 & 「第20回パーキンソン病体操教室」

実施日時：令和6年1月21日（日） 10：00～12：00

開催場所：金沢市文化ホール（大集会室）

講演：順天堂大学脳神経内科教授 服部信孝先生

演題：パーキンソン病治療の明るい未来を語る

リハビリ教室：KMCとPDハウスのリハビリスタッフによる合同リハビリ教室

懇親会・相談会：脳神経内科専門医、LSVT資格のあるリハビリスタッフによる質疑応答

参加者人数： 81名

患者および家族 66名

石川県立看護大学スタッフ 9名（6名のボランティア学生を含む）

KMCスタッフ 3名

講師 3名

*LSVT：パーキンソン病に特化したリハビリテーションを行うための資格

令和6年1月21日（日）に金沢文化センターにて「第20回パーキンソン病体操教室」（金沢医療センター）と「第5回パーキンソン病いきいきリハビリ教室」（石川県立看護大学附属地域ケア総合センター）を合同で開催した。看護大学の学生6名のボランティアを含め総勢81名が参加した。このリハビリ教室では、世界で活躍しパーキンソン病研究および治療においてトップバッターでおられる順天堂大学脳神経内科の服部信孝先生をお招きして講演「パーキンソン病治療の明るい未来を語る」を拝聴することができた。

最新の血液を用いた診断法、パーキンソン病の薬物療法やデバイスを使用した治療のほか、前向きに生きることが何よりも進行を予防することに有用であることが紹介された。また、パーキンソン病に関するベンチャー企業を立ち上げており、その中で症状を安定させる薬の開発が数年で終了することも話をされ、患者さんに希望を与えていた。

昨年度のリハビリ教室で好評であったPDハウス小坂の柳先生と田川先生によるリハビリ指導でパーキンソン病に特化して開発されたLSVT®BIGのリハビリを実際に行った。また、金沢医療センターの音楽に合わせたリハビリも行うこともできた。相談会は、日頃の療養で疑問に感じることや療養で気を付けるべきことなどの質問があり、服部教授が返答をおこなった。

4. 評価と今後の課題

パーキンソン病の療養においてリハビリの大切さを理解してもらい、楽しく身体を動かす機会となった。今年度は七尾市と金沢市での開催となった。来年度以降においても、金沢医療センターと連携を行い、継続したリハビリの啓発活動を計画していくとともに、きめの細かいリハビリ教室の開催とその効果についての検証を行う必要がある。リハビリの大切さがわかっても、継続して行うことが難しく今後の課題となっている。

また、本教室で開催される交流会では、パーキンソン病患者および家族がお互いの状況や生活についての情報を交換する機会となっているだけでなく、普段の診療では聞けない悩みに関する相談もでき、貴重な意見交換の場になった。

実施後のアンケートでは、今回のリハビリ教室の開催を良かったとするものが大半であった。継続的な開催を期待するとの意見も多く、今後も金沢医療センターとの協力を含めて、継続的な開催と参加者人数を拡大させた開催を検討していくことが必要であると考えられた。

2-1-5 ひとりで悩まないで！乳がんサバイバー同士で語り合おう

企画担当：瀧澤 理穂 / 成人看護学 助教

1. 事業の目的

乳がんは子育て世代の罹患率が高く、症状や治療における身体的苦痛に加え、子育て、家事、育児、仕事といった様々な社会的役割を担う上での困難が生じている。

近年、がん対策推進基本計画の取り組みの一つとして相談支援及び情報提供の機能をもつがんサロンの充実が求められている。がんサロンで乳がんサバイバー同同士が療養や生活上の悩みを話し、情報交換することは不安の軽減や闘病への意欲につながる。しかし、新型コロナウイルスの影響によりサロンでの活動が制限され、乳がんサバイバーは自らの悩みを表出する場や情報を得る機会が失われていると考えられる。

2. 実施状況

本企画は実施責任者（瀧澤）の他、石川県の乳がん患者（ひまわり会）と石川県立看護大学名誉教授／がんサロンロゴス代表者（牧野智恵氏）の協力を得て実施した。また北陸3県から乳がん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師を講師に招いた。本企画は、会場参加とオンライン参加のハイブリット形式を予定していたが、参加者の希望および新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて完全オンライン開催となった。

【開催日時および参加状況】

第1回：令和5年5月27日（土） 13:00～15:00 参加人数：7名
第2回：令和5年8月26日（土） 13:00～15:00 参加人数：6名

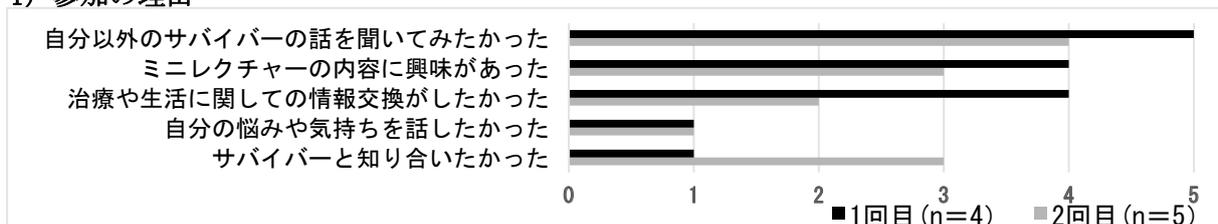
3. 実施内容

第1回は、福井県立病院 乳がん看護認定看護師/がん看護専門看護師の中野妃佐恵さんから「乳がんと遺伝」に関するミニレクチャーをして頂いた。がんと遺伝の関係性、遺伝性乳がんに不安を抱いた際の検査や相談先などについて丁寧に教えて頂き、その後、子どもへの遺伝性やがん検診の必要性に関する伝え方などについて意見交換を行った。参加者からは「遺伝の問題は不確かで答えがないからこそ、自分の気持ちを大切にしてみたいと思った」「いまここで最終決断をしなくてもいい。子どもにはがんの遺伝性についてどう伝えたらよいかと悩むが、家族とも相談しながら、そのときの状況に応じてまた考えていきたい」などの意見交換がなされた。

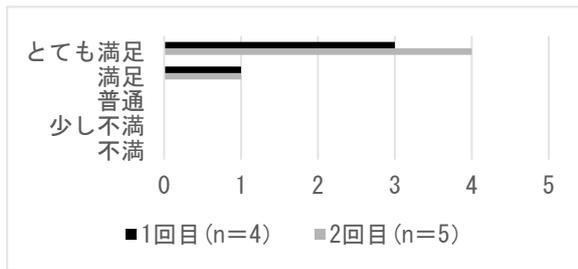
第2回は、金沢医科大学病院 乳がん看護認定看護師の久野真知子さんから「アピアランスケア（治療によって生じる外見の変化に対するケア）」についてミニレクチャーをして頂いた。外見症状による苦痛を緩和させるメイクや保湿方法の工夫、身近な相談窓口や助成金制度などについて具体的に教えて頂いた。参加者からは「眉毛の描き方や血色よく見えるチークの入れ方などすぐ試したいと思えるメイク講座だった。」「外見のことは医療者には相談してもいいのかと迷っていたが、自分らしく笑顔でいられるためにも相談していきたい」などの言葉が聞かれた。

4. アンケートの結果

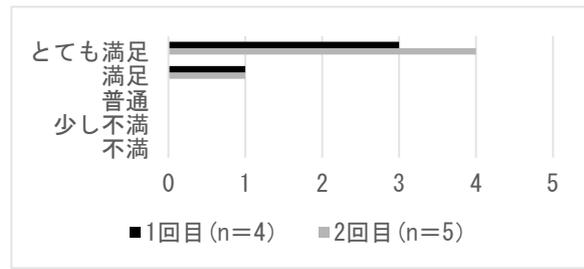
1) 参加の理由



2) 参加者同士の語り合いについての満足度



3) ミニレクチャーについて



5. 評価と今後の課題

参加者の中には、通院している病院にがんサロンや患者会がなく同じ病気を抱える患者との交流を求めている方、体力的に対面のがんサロンに参加する不安があった方や入院中に病室からスマートフォンで参加された方などがいた。オンラインでのがんサロンではその場の空気感が伝わりにくい難点はあるが、移動がなく患者にとって体力の負担が少ないという利点があった。

アンケートの結果では、参加者同士の自由な語り合いの時間とミニレクチャーの時間はともに満足度が高いことがわかった。参加者からは、「お互いの経験や思いを伝えあう場を通して、悩みはひとりで抱えずに仲間に話してみることの大切さを感じられた。」「正解のない悩みも多いからこそ、同じ病気の先輩や専門知識のある看護師さんにちょっと気になっていたことを相談できて安心した。」との意見が聞かれた。ミニレクチャーや専門的な助言によって参加者の治療や生活に関する不安軽減がされるとともに、同じ経験を共有できる同病者との意見交換や温かい励まし合いが闘病の意欲や癒しとなり、がんサバイバーのQOL向上に貢献できたと考える。また本企画は2回の開催であったが、この参加を機に、同病者の知り合いができ、地域のがんサロンに参加し始めた方や講師から紹介された窓口に相談に行かれた方もおり、地域で療養するがんサバイバーの継続的なサポートにもつながる有意義な企画となった。

今後実施してほしい企画やミニレクチャーのテーマとしては、「若者のがん検診」「がん患者のリハビリ」などが挙がっており、北陸の乳がんサバイバーの声を臨床や研究に届ける取り組みを実践していきたい。

令和5年度 石川県立看護大学 地域ケア総合センター 地域連携・貢献事業

ひとりで悩まないで！

乳がんサバイバー同士で語り合おう

本企画に参加し、乳がんサバイバーの仲間とともに語り合いませんか？
講師によるミニレクチャーも同時開催しています！ご参加お待ちしております

対象 乳がんサバイバーの方 **参加費** 無料

開催方法 オンライン (ZOOM)

第1回 5月 27日 (土) 13時 ~ 15時
講師：福井県立病院 がん看護専門看護師・乳がん看護認定看護師 中野 妃佐恵 さん
ミニレクチャー「乳がんと遺伝について」

第2回 8月 26日 (土) 13時 ~ 15時
講師：金沢医科大学病院 乳がん看護認定看護師 久野 真知子 さん
ミニレクチャー「アビアランスケアについて」
※アビアランスケアとは、治療によって生じる外見の変化に対する支援のことです。

お申し込み、お問い合わせ先
企画責任者：石川県立看護大学 成人看護学講座 滝澤 理穂
電話：076-281-8300 (代費) 8362 (直通)
メール：takizawa@ishikawa-nu.ac.jp
住所：〒929-1210 石川県かほく市宇田台1-1
※石川県立看護大学のサイトからもお申し込みできます。
トップページ→地域ケア総合センター→事業案内→令和5年度事業一覧 QRコードからも申し込み可能

※申し込みの締め切りは開催日の3日前とさせていただきます。

第1回

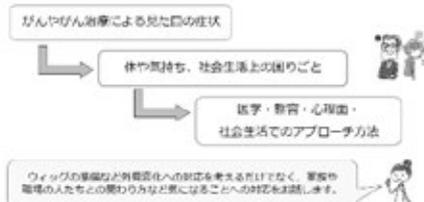
遺伝外来で私が行っていること

- カウンセリング前には 受診の経緯やお気持ちを伺います
血縁の方の病気について詳しくお聞きします
- カウンセリング中には 同席させていただきます
- カウンセリング後には わからないこと、不安なことはないかなど伺います

むずかしいと思われるがちな遺伝のことや検査などについて
正しく理解していただけるよう、
また、心配なことや迷うことに対して
お手伝いをさせていただきます

第2回

アビアランスケアってどんなケア？



2-1-6 いきいき世代とつくる健康教室（地域公開講座）

企画担当：松本 勝 / 成人看護学 准教授

1. 事業の目的

かほく市いきいきステーション（七塚健康福祉センター集会室）にて地域公開講座を開催し、看護大学教員の知見を市民に還元する。いきいきステーションに定期的に訪問し、学生・教員と地域のシニア世代との交流活動を行い、学生においては対象理解や地域のニーズ把握を促進し、シニア世代には社会参加の機会となる。

2. 実施状況

いきいきステーションの協力のもと、本学教員による地域公開講座を6月から10月に全5回実施し、男性44名・女性148名の計192名が参加した。企画書をいきいきステーションに提出、開催概要を提示し、いきいきステーションからかほく市の広報誌に掲載、各回の参加者募集を依頼した。

6/14-6/15に開催した第1回の地域公開講座ではテーマを「まだまだ間に合う！もっと増やそう！筋肉貯金！！～筋肉の量をみてみよう～」とし、本学の学部1年生の必修科目「フィールド実習」の一環として、学生及び教員がいきいきステーションを訪問し、地域公開講座の運営補助やいきいきステーションの行事に参加し、かほく市のシニア世代との交流活動を行った。

3. 実施内容

地域公開講座（全5回）

<第1回>令和5年 6月14日（水）13:30～15:00 担当者：大橋史弥講師

6月15日（木）9:00～12:00（測定会、本学1年生が参加）

テーマ：まだまだ間に合う！もっと増やそう！筋肉貯金！！～筋肉の量をみてみよう～

参加者：86名

<第2回>令和5年 8月10日（木）13:30～15:00 担当者：松本勝准教授

テーマ：「睡眠・食・排泄・活動について学ぼう～日々のパフォーマンスを高めるには！？～」

参加者：24名

<第3回>令和5年 9月6日（水）13:30～15:00 担当者：金子紀子准教授

テーマ：「健康寿命をのばそう！フレイル、ロコモとは？」

参加者：21名

<第4回>令和5年 9月25日（月）13:30～15:00 担当者：牛村春奈助手

テーマ：「口からはじめる介護予防～口の衰えは要介護状態につながる！？～」

参加者：26名

<第5回>令和5年10月26日（木）13:30～15:00 担当者：日高未希恵講師

テーマ：「自分らしい生き方を考えよう！「人生会議」

参加者：35名

4. 評価と今後の課題

4月より早々にスケジュール調整を行ったことで積雪前の参加しやすい時期に全日程を終えることができた。参加者数は例年より多かった。

6/14-6/15の公開講座では特に参加人数が多く2日間の参加者は述べ86名であった。体組成（筋肉量、脂肪量等）の項目などの測定会を取り入れたことや看護大学の学生も参加すると事前にチラシで宣伝いただいたこと等が参加者増につながったと考えている。看護大学の学生にはこれまで高齢者との関わりを持ったことが少ない学生もあり、公開講座や測定会の運営をサポートしながら多くの高齢者と関わりを持てたことは大きな学びになっていた。参加した高齢者からも看護大学の学生と交流をもてたことに喜びの声が挙がっていた。また普段は女性の割合が高い講座ではあるが、「筋肉/筋力」に関するテーマを取り入れたことで男性の参加者も増加したと考えている。

学生の実習やその他の課外活動などと絡めて公開講座を開催できれば学生の学びや参加者の満足度にもつながると考えられるため、次年度も担当者を中心にして企画を考えていきたい。



2-1-7 能登の健康応援隊

企画担当：大西 陽子 / 成人看護学 講師

1. 事業の目的

能登町では就学や就職時に若者が町外へ流出し、人口減少とともに過疎化が進行し続けており高齢化率は50%以上である。それに伴い、伝統文化や地域産業を継承する人が減少し医療体制の確保も難しくなっている。グランドゴルフやペタンクなどのスポーツ大会に積極的に参加している60～90歳代の住民は、身体的健康に対する関心が高いだけでなく、他者との交流による心の健康の維持に努めている。しかし、進行する高齢化・過疎化とともに交流が減少し健康に対する不安を抱えている。そこで本事業では看護大学の特色を活かし、地域住民の健康意識の向上を目的に地域で活動する諸団体と連携し、地域住民と交流しながら健康づくりをサポートする。

2. 実施状況

令和5年9月24日（日）開催の第36回猿鬼歩こう走ろう健康大会の参加者および応援者を対象に体組成計測を実施。

3. 実施内容

能登町教育委員会と連携し健康チェックブースを設け、本学教員5名、学部生6名で体組成計測および健康に関する聞き取り調査を行った。

健康チェック参加者は子どもから高齢者まで約70名であった。測定時、「毎年測定してもらい去年の結果と見比べている」「いつも健康チェックを楽しみにしている」等の感想をいただき、次年度も継続して欲しいという要望も聞かれた。健康チェックは地域住民に浸透し交流の基盤となりつつあり、地域住民の健康維持に対する意識付けとなっている。

また、健康チェック時に行った聞き取り調査の結果（回答者数63名）、石川県内参加者90%、県外参加者10%であった。健康を維持するために関心のあることとして（複数回答）、体力維持のための運動52%、食事25%、体形維持21%、生活リズム改善5%であった。多くの人が「ウォーキングの習慣がある」「週に1度プールに通っている」「脂肪が増えない程度に食事に気を付けている」等、無理なく自身の生活に取り入れることで健康を維持しようと心掛けていることが推測された。

4. 評価と今後の課題

健康チェックを通して地域住民との交流の場を形成することができたが、健康に対する不安解消のアプローチには至っていない。聞き取り調査の結果で住民は健康を維持するための運動・食事・生活習慣に関心があることが明らかとなったため、次年度の健康チェックでは、健康を維持するための運動・食事・生活習慣に関する啓発活動を加えていきたい。

また、本大会には県外参加者も一定数いることから能登のPR活動を行うことで、さらなる交流の場の拡大を目指していきたい。

2-1-8 「運動が好きになる」親子スポーツ交流会

企画担当：垣花 渉 / 健康体力科学 教授

1. 事業の目的

「運動が苦手・嫌いな小・中学生を対象に、身体を動かすことが面白くて楽しくなる体験会をつくること。

2. 実施状況

事業代表者は、大学近隣に住む幼児や小学生とその保護者を対象に、ボールや遊具などを使いながら親子で一緒に身体を動かすことで運動を楽しむ機会を2回実施した。宝達志水地域おこし協力隊（スポーツ文化振興課）と連携し、1回あたり親子10組（約20名）を体育館へ招き、運動の解説→主運動→体験のふり返りで構成される120分の運動体験のプログラムを作成した。

3. 実施内容

5月3日（水・祝）、8組32名の参加者を招き、看護大学体育館で120分のプログラムを実施した。

10月15日（日）、7組21名の参加者を招き、宝達志水町体育館で120分のプログラムを実施した。

上記の2つのイベントの報告を、本学のHP上で行った。5月のイベントの様子は、北陸中日新聞でも取り上げられた。

4. 評価と今後の課題

イベント実施後に行ったアンケートでは、親子でスポーツを楽しむ機会への満足度がきわめて高かった。今後の課題は、このような機会の継続である。そのためには、地域の総合型地域スポーツクラブとの連携が不可欠となる。併せて、実施に向けた予算の確保も課題となる。

2-1-9 こころのシネマ学園台

企画担当：美濃 由紀子 / 精神看護学 教授

1. 事業の目的

映像作品の鑑賞を通して、精神医療福祉や精神疾患への関心を高め、正しい理解の深化につながるような体験提供の一翼を担うこと。映像作品のテーマはこころの健康(メンタルヘルス看護)などである。上映会后、参加希望者とテーマについて自由に語ることのできる場を設け、交流の機会や学びの機会とする。また、大学と専門職間の連携の可能性を探る。

2. 実施状況

(1) 開催日時

第1回 令和5年10月22日(日) 13:00~16:00

第2回 令和6年3月9日(土) 13:00~16:00

(2) 開催場所、上映映画

本学講堂、「人生、ここにあり！」

(3) 参加者人数(延べ人数)と属性

第1回 上映会：地域住民の方：2名、本学の学生：4名、本学の教員：4名
交流会(シネマ de カフェ)：10名

第2回 上映会：地域住民の方：7名、本学の教員：4名
交流会(シネマ de カフェ)：8名

(4) 講師等

コーディネーター：美濃 由紀子(石川県立看護大学 精神看護学 教授)
大江 真吾(石川県立看護大学 精神看護学 講師)
事務局：川俣 文乃(石川県立看護大学 精神看護学 助教)
高濱 圭子(石川県立看護大学 精神看護学 助教)

3. 実施内容

本事業の目的である正しい理解の深化を達成するため、地域で生活する精神疾患を有する方たちのリカバリーをテーマとした映画「人生、ここにあり！」を上映した。参加者からは「とてもおもしろい映画で精神疾患の方の捉え方が変わるものであった」「自分から進んで見るような作品ではなかったため、新しさがあり、同時に精神看護について学ぶことができた」という感想が聞かれ、参加者の精神疾患への正しい理解が深まったと思われる。リピーターとして参加してくれた地域住民の方もおられ、「同じ映画を2回みることで1回目より視野が広がり、新しい発見や気づきがあった」という感想も聞かれた。

上映後の交流会は、地域住民の方や本学学生が参加した。交流会の中では映画の感想を述べ合い、日本とイタリアの文化的な違いや映画内で重要なテーマである薬物療法についての話し合いがあった。参加者からは薬物療法を受ける精神疾患を有する方への看護ケアについてや、専門職である看護師が薬物療法をより理解することでより良い看護ケアにつながる可能性、日本での取り組みへの示唆などについて話され、地域の方、学生、本学教員で有意義な会をもつことができた。

4. 評価と今後の課題

(1) 評価

本事業参加後に参加者が回答したアンケートでは、参加者の80%以上がやや満足～満足と回答し、意見や感想として「とてもおもしろい企画であり貴重な体験だと思う」「もう少し多くの人と話したい」などとあったことから、本事業の目的である学びの機会の提供として参加者の要望に応えられた事業であったと考える。また、今後も本事業に参加したいと90%以上の参加者が回答しており、事業継続の声が多くあった。

(2) 今後の課題

チラシ配布、メールによる広報活動を行ったが参加者が少ない結果となった。学園祭で配布するなど工夫を行ったが、参加者からは事業の開催日や内容についてもっと早く知りたかったという声も聞かれたため、今後は開催日の数か月前には広報活動を開始し、事業の周知に努める。特に、参加者を増やすことで交流の機会をもちたいという意見があったため、地域住民の関心事の把握、大学周辺の住民への周知、かほく市の広報媒体を活用することで幅広い年代に知ってもらえるような広報を実施していきたい。また、継続して参加いただけるリピーターの数も増やしていきたいと考える。

大学と専門職間の連携を探るため、今年度も県内の医療機関へチラシを配布した。参加者には地域の医療機関からの専門職の参加がなかったため、令和6年度も県内医療機関へチラシを配布するとともに、参加を募っていく。



2-1-10 『学童期・思春期の子どもを持つ母親への子育ての「Aka' aka サロン」』

企画代表者：後藤 亜希 / 小児看護学 助教
 企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 教授
 河合 美佳 / 母性看護学 助教
 千原 裕香 / 小児看護学 講師
 西 真理子 / 小児看護学 助手

1. 事業の目的

学童期・思春期の子どもを持ち、子育て等に悩む母親を対象に、気軽に参加できるサロンを開き、レスパイトケア（子どもと離れる時間の確保）や、安心して子育てや親子関係などについての悩みを話し合える場を提供した。育児困難に悩む親同士および支援者と親との信頼関係を育てながら親を継続的に支援することを目的とした。

2. 実施状況

【開催日時】 令和5年 8月18日（金）、9月15日（金）、10月6日（金）、11月10日（金）、12月1日（金）の5回で各10:00～15:00に実施

【場所】 かほく市子ども総合センターおひさま

【プログラム内容と参加者数】

I. 親育ち・子育てを考える会（10:00～12:00）

「完璧な親なんかいない(通称NP)」の手法を用いて、5回シリーズで子どもの学校について、子どもとの関わり方、夫や祖父母の関係など、テーマを決めて話し合った。

参加者：61名（延べ人数）

II. 母親だけのスペース『Aka' aka ルーム』（13:00～15:00）

参加したお母様たちは、リラックスした音楽が流れる中でお茶やお菓子をいただきながら、子どもと離れてゆっくりしたり、安心しておしゃべりしたり、家ではなかなかできない作業（ゆっくり本を読むことなど）をしたりと、自分の時間を楽しんでおられた。

参加者：41名（延べ人数）

回数	開催日	親育ち・子育てを考える会		『Aka' aka ルーム』	
		参加者	託児数	参加者	託児数
1回目	8月18日	9	4	11	8
2回目	9月15日	14	3	10	4
3回目	10月6日	16	4	7	3
4回目	11月10日	12	5	5	2
5回目	12月1日	10	1	8	3
延べ人数		61	17	41	20

3. 実施内容

I. 親育ち・子育てを考える会（10:00～12:00）についての報告

◇話し合われたテーマ

1回目：「お互いを知ろう」「話し合いたい内容を出そう」（勉強や子どもの友達などの学校について、夫との関係や祖父母・介護のこと、子どもへの対応として反抗期や学校で

のトラブルが起こったときどんな対応をしていたか、スマホのルール、日々の生活について朝ごはんや手抜きの方法など、自分の心の余裕やリフレッシュは何してるなど)

2 回目：「子どもの学校について気になることを出し合おう」

3 回目：「子どもの学校について」(宿題への対応、子どもの送迎・学校、園への行き渋り、子どもの友達関係、学校の先生への対応)

4 回目：「夫・祖父母について」

5 回目：「祖父母・介護について」「リフレッシュやストレス発散法について」

4. 評価と今後の課題

【評価】

私たちは、乳幼児の子どもを持つ母親を対象とした「完璧な親なんていない Nobody's Perfect プログラム (以下 NP)」による子育て支援を 2007 年から続けており、NP に参加した人のその後のフォローアップ支援として、昨年まで子育てどろっぷ・イン・さろんを行ってきた。そのため、参加者の子どもが学童期・思春期となり、参加者から学童期・思春期特有の悩みを話されるようになってきた。そこで今年度は、学童期・思春期の子どもを持つ母親に特化した子育て支援として Aka'aka サロンを開催することとした。共通の問題を中心に母親が安心して話せる場になると考えた。

昨年度の子育てどろっぷ・イン・さろんの参加者は、親育ち・子育てを考える会では延べ 35 人、どろっぷ・イン・る一むでは延べ 40 人だったのに対し、今回の Aka'aka サロンでは親育ち・子育てを考える会は延べ 61 人、Aka'aka ルームでは延べ 41 人であり、どろっぷ・イン・る一むと Aka'aka ルームでは変わりなかったが、親育ち・子育てを考える会の参加者が 1.7 倍であった。これは予想を超える人数であり、学童期、思春期支援の必要性が高まっているといえる。この時期のグループ支援がなかなかないため、今後も実施していきたい。

話し合われた内容では「こどもの学校について」2 回にわたって話し合った。皆さんの悩みとして、宿題の対応や送迎、行き渋りや不登校、教員や他の友人との関係性等について悩んでいた。中には、不登校のお子さんを持つ母親が複数名おり、学年によっても不登校のこどもとの寄り添い方に困難の違いが見られた。学童期では学校の先生との調整や、フリースクールの利用などをされていたが、思春期に入ると、それに加え、反抗期にもなり、感情のぶつかり合いに心痛めたり、高校、大学の単位が取れず、転校を余儀なくされたり、病院受診が思うようにならないなどの関わりがあった。不登校での悩みは、誰にも相談できない孤独な状態で子どもに向き合っている母親や、すでにいろんな機関と相談しながら、学校に行かなくても何とかするという考えに至っている母親もいた。不登校ではなくても、子どもの友達や学校での宿題や先生への対応について、子どもと感情のぶつかり合いにつながることもあった。いろんな母親がお互いの状況や思いを話し合う中で、情報交換や考え方の共有、孤独の軽減になったと思われる。今後も情報交換や孤独の軽減などの場として、実施していく必要がある。

【今後の課題】

昨年まで実施していた子育てどろっぷ・イン・さろんでは、乳児期、幼児期 NP の卒業者を対象としていたため、乳幼児期の母親も今回対象とした。そのため、学童期・思春期の母親は、話し合う内容が学童期以降のことが多く、乳幼児期の母親が参加して、役立つものになっているのか懸念していた。今後は、学童期・思春期の母親に限定することが、共通の問題を中心に話しやすい場となり、母親が安心して話せる場になると考えた。

学童期、思春期の母親は仕事をしている母親も多く、わざわざ仕事を休んで参加しているとのことであった。そのため、参加したくても外せない仕事が入り、休まざるを得ない場合もあった。今後は、土日のサロンを実施することも検討していく。

2-1-11 宝達志水町における祭礼行事のアーカイブ作成

企画担当：松田 幸久 / 心理学 准教授

1. 事業の目的

宝達志水町南部を中心として祭礼行事のデジタルアーカイブを作成する。アーカイブ時には写真撮影や動画撮影を行い、電子媒体として記録と保存を行う。これは単に祭礼や練習の風景を見栄え良く撮影するという程度にとどまらず、使われている固有名詞や所作についての完全な記録を作成することを最終目的とする。

2. 実施状況

令和5年度ではNPO法人宝達スポーツ文化コミッション（代表者：村井仁志理事長）の越野貴成事務局長（以下、事務局長）と協働し、宝達志水町南部河原区を対象としてアーカイブ化を試みた。当該年度での活動状況は以下のとおり。

- 5月：事務局長とリモートにて打ち合わせ（1回）
- 6月：事務局長、河原区区長、祭礼催行代表者と連絡、令和5年度での祭礼実施予定を確認
- 7月：事務局長と電話、対面にて打ち合わせ（複数回）
NPO法人との協定開始（年度締めで単年のもの）
祭礼行事の練習場にてアーカイブのための動画と写真撮影実施（2回）
- 8月：祭礼行事の練習場にてアーカイブのための動画と写真撮影実施（1回）
祭礼当日（8月20日）に同行し動画と写真撮影実施（1日）
事務長との打ち合わせで宝達志水町大花火大会にて当該地区の獅子舞の出演を準備
- 10月：宝達志水町大花火大会（10月4日）での獅子舞の撮影（1日）
当該地区住民2名より祭礼行事で使われる名称などの聞き取り（2回）
- 1月：当該地区において、毎年、祭礼行事の写真や動画をとっていた者がおり、それらに協力を依頼して、記録のコピーを作成（複数回）
祭礼催行の代表者に今年度の記録をお渡し

3. 実施内容

本年度での成果は、1) 祭礼行事全体の確認とアーカイブ化すべき対象の確認、2) 撮影などに必要な物品の購入、3) 行事の一部をアーカイブ化、4) 関係団体との次年度以降の関係構築、であった。なお、3) においては成果物として祭礼催行代表者に謹呈した。

4. 評価と今後の課題

本年度は正式な活動の初年度であったことを鑑みると、スタートアップとして必要な活動を網羅したと考えている。今後の課題として、1) 祭礼で使用する道具類の撮影とアーカイブ化、2) 深夜帯での獅子舞の記録、3) 獅子舞の教本的な動作確認のための動画撮影、があげられる。1) については実施が容易であることから優先順位を下げたため未実施であった。2) については光量が少ない中で鮮明な記録ができる機材を導入し問題を解決することとした。



左：笛の吹き方の教本動画、右：祭礼当日 1



左：祭礼当日 2、右：祭礼当日 3



左：宝達志水町花火大会での獅子舞、右：資料提供の一部



左右：2000年ごろの祭り。提供された動画からの切り取り

3 そ の 他

3-1 かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

企画担当：塚田 久恵 /地域ケア総合センター センター長（教授）

1. 事業の目的

本学は、平成22年10月にかほく市との間で締結した包括的連携協定に基づき、さまざまな事業に取り組んでいる。この協定は、かほく市の健康推進をはじめとした豊かな地域づくりに向けて本学が支援・協力を行うとともに、本学の教育・研究活動が充実するようかほく市に支援いただく、いわば双方向の協力を企図して締結されたものである。

2. 実施状況及び内容

今年度はかほく市が幹事となり、2回の協議会を開催した。

6月16日（金）第1回協議会：令和4年度の事業実績報告および令和5年度の事業計画案

12月13日（水）第2回協議会：令和5年度事業の進捗状況報告と令和6年度の事業計画案

今年度、かほく市からは13事業が、本学からは1事業が提案され、計画どおりに事業を実施することができた（表1）。このうち、本学提案の「高齢者と看護学生との交流事業」については、コロナ禍以降、家庭訪問はお手紙の送付や学内での演習に切り替えられてきたが、令和4年度は家庭訪問とお手紙のハイブリッド形式で行われ、今年度は家庭訪問を全面的に再開した。また、かほく市から提案された「高齢者のeスポーツ体験会」については、イベント関係にとどまらず、「地域在住高齢者のeスポーツ体験における効果検証」の研究も行った。

表1 令和5年度「かほく市と石川県立看護大学の包括的連携」事業

	主催	事業（市担当課）	看護大担当
1	かほく市	かほく市ケーブルテレビ事業（情報推進課）	垣花教授他
2		健康ブランド化事業（健康福祉課）	垣花教授
3		発達障害に関する相談事業（健康福祉課）	大江講師
4		いきいきシニア活動推進事業（長寿介護課）	松本勝准教授他（地域公開講座）
5		地域支援事業（長寿介護課）	金子准教授（会議への参加） 総務課担当（シンポジウム後援依頼）
6		通いの場における介護予防事業（長寿介護課）	—
7		家族介護者教室（長寿介護課）	川島教授
8		eスポーツ体験会（長寿介護課）	米澤教授他
9		かほく市民体力テスト（スポーツ文化課）	—
10		ウォーキング事業（スポーツ文化課）	—
11		問題を抱える子ども等の自立支援事業（学校教育課）	武山名誉教授
12		教育相談事業（学校教育課）	武山名誉教授
13		妊娠期から切れ目のない育児支援事業（子育て支援課）	米田教授他
14	看護大	高齢者と看護学生との交流事業（長寿介護課）	米澤教授

「いきいきシニア活動推進事業」の「地域公開講座」は、七塚健康福祉センターの多目的ホールで6回実施され、参加者は合計192名であった（表2）。また、「生涯現役フォーラム」は、同会場にて11月8日に、「怒りとうまく付き合うコツ～より豊かな人間関係をはぐくむために～」というテーマで米澤洋美教授が講演し、参加者は58名であった。これらの講座とフォーラムは、

シニアの方々の生活を豊かにするための活動として実施された。

表2 地域公開講座

回	月 日	テーマ	講師名	参加者数
1	6月14日	まだまだ間に合う！もっと増やそう！筋肉貯金！！～ 筋肉の量をみてみよう～	老年看護学講師 大橋史弥	35
2	6月15日	まだまだ間に合う！もっと増やそう！筋肉貯金！！～ 筋肉の量をみてみよう～ 測定会	老年看護学講師 大橋史弥	51
3	8月10日	睡眠・食・排泄・活動について学ぼう ～日々のパフォーマンスを高めるには！？～	成人看護学准教授 松本 勝	24
4	9月 6日	健康寿命をのばそう！フレイル、ロコモとは？	地域看護学准教授 金子紀子	21
5	9月25日	口からはじめる介護予防 ～口の衰えは要介護状態につながる！？～	在宅看護学助手 牛村春奈	26
6	10月26日	自分らしい生き方を考えよう！人生会議	在宅看護学講師 日高未希恵	35
合 計				192

3. 評価と今後の課題

令和5年度は、5月にCOVID-19の感染症法上の位置づけが5類に移行したことにより、以前のように事業を対面で開催することが可能となり、多くの方々に参加していただくことができた。今後も、地域の人々がより健康的な生活を送ることができるよう、本学の知見や専門性を活用した事業の検討を続けていきたい。

また、今年度は、eスポーツ体験会などを通じて研究フィールドを広げる試みも行われた。これらの取り組みは、新たな研究のきっかけを作り出すだけでなく、地域社会との連携を深め、高齢者の生活の質を向上させることにつながると考えている。

今後も、かほく市の生涯学習課、健康福祉課、長寿介護課など各部署と協力して事業の強化を図るとともに、地域の健康課題の解決を視野に入れた研究を進めていきたい。そして、これらの活動を通じて、地域の皆様がより充実した生活を送ることができるよう、引き続き努力してまいりたい。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書（第21巻）

令和6年7月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台1丁目1番地

Tel.076-281-8301 Fax.076-281-8319

© 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。

